

自然法爾のいのち観

田代俊孝

(同朋大学)

はじめに——「実践仏教学」の立場から——

仏陀の説いた仏教は、悩める衆生のためのものであった。学理の研究もさることながらそれを基礎に、それが、具体的に衆生の苦悩をどう救っていくかという研究は、もっと重要である。従来、それを教化学といった呼称でよばれることもあった。しかし、従来の教化学には、伝道の仕方、技術論、組織論といった意味合いが強かった。それも一部に含めるがそれだけではなく、現実社会の苦悩する人々と苦悩を共有し、それを仏教の教えで超えていく実践的学びを「学」の対象とするため、筆者はそれを「実践仏教学」と提唱したい。

もちろん、仏教についての文献研究、教義学、史学、文化を離れて別個の領域として存在するのではなく、それらを基礎として、現代社会の課題をいかに超えていくか、あるいは、現に苦悩している人々とともにどう救われていくかというところの仏教を実践していく「学」である。つまり、それぞれの時代・社会の種々の状況の中で、信仰内容（告白）、社会の課題への関わり方、活動論（運動論）そして、それに対する信仰内容の弁証とをつねに新しく検討し、これを体系的、組織的に追及していく「学」、である。詳しくは、機会をあらためて述べたいが、今回は、「仏教と自

然」のテーマを、現実の課題に対応してこのような視点で述べてみたい。

一 二つの課題

第一の課題は、末期患者における死の受容とそのサポートの問題である。高齢化社会の中で、老いや死をどう受け止めるのか。また癌やエイズの患者が、死をどう受容し、死の瞬間までいきいきと生き、いのちの満足をどう実感するかという問題である。

死がタブー視される中で、病名告知の困難さの問題、そして、末期患者を精神的な立場でどうサポートするかという問題である。

第二の課題は、生命倫理の問題である。今日の先端医療の場では、いのちはモノ化され、生命の尊厳が失われつつある。そして、それが、経済と結びつき、大きなビジネスとして展開され始めた。たとえば、遺伝子の診断や治療・操作、臓器の売買、ヒトへのホルモン投与による成長の操作、代理母、精子バンク、卵ドナー、凍結受精卵、胎児の脳細胞の利用、出生前診断、さらには、ヒト受精卵のクローン化などである。われわれは、これらに大きな戸惑いと未恐ろしいものを感じる。人間は生命の神秘にどこまで手をさしはさんでいいのだろうか。また、自然の摂理をどこまで侵していいのだろうか。と同時に、自らが、それほどまでして、延命したいのかということが課題である。

これらの問題は、単に自然科学的な立場だけで解決できるものではない。普遍宗教の立場でも考えていかねばならない。西洋の近代科学の行き詰まった問題について、東洋の哲学とそれに基づく実践で超えて行く道が見出せるかも知れない。これらの問題は、核の問題とともに、人類にとって焦眉の最も大きな問題である。

さて、このような中で、西洋の近代科学は人間を「万物の霊長」とし、それに恩恵を与える科学自体を絶対善とし、イギリスの産業革命以来、開発、進歩、発展、向上を最善として今日の社会を築いた。しかし、その結果地球は明らかに滅亡の方向をたどり始めた。それは、人間至上主義、非自然主義の結果である。そして、その中の生命倫理の基準は「人格」に与えられた「人権」、あるいは「基本的人権」であった。したがって、人権という概念であらゆることを裁くということで、問題解決の統一的基準を設定し、価値づけられてきた。この流れの中でリビング・ウィル、自己決定権、インフォームド・コンセントといった概念が倫理基準として浸透してきたことは、周知のとおりである。しかし、これらの価値観をゆるがしてきたのが、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）、遺伝子治療における「優生学（優生思想）」、死の再定義などである。結局、人権、習俗、功利（合理主義）がぶつかり合って、混乱しているといえよう。

このような状況の中で、環境倫理では、仏教の共生思想（椎尾弁匡の「共生の哲学」）が注目され始めた。そこで今、東洋思想の底流にある自然思想（たとえば、親鸞の「自然法爾」や中国思想の「無為自然」）に上に示した問題の解決の方向求めてみたい。

二 自然法爾の立場から

自然法爾の立場は、第一の課題、とりわけ末期医療の場で、あるいま、そういう場でなくとも、一般に、死を前にしたとき、それをいかに受容するかということにおいて、大きな救いとなる。現に、ビハラの現場では、この言葉が最も、患者に心の安らぎを与え、仏教の救いの言葉として求められる。

たとえば、死に對し、われわれは、「生はプラス、死はマイナス」、「延命こそ最善」、「上手な死に方は最高」などという価値観にとらわれている。しかし、実際には思いどおりならず、死に向っている。それゆえ、死が「苦」になる。これに對し、親鸞は、一切を「自然」ととらえ、自然法爾を説く。例えば、

「生死无常のことはり、くはしく如来のときをかせおはしましてさふらふうへはおどろきおぼしめすべからずさふらふ。まづ、善信が身には、臨終の善悪をばまふさず。信心決定のひとは、うたがひなければ、正定聚に住することにて候うなり。」⁽¹⁾（『末燈鈔』六）

「善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり。」⁽²⁾（『歎異抄』）

「自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらざして、南无阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへんと、はからはせたまひたるによりて行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とは、まふすぞ、とききてさふらふ。」⁽³⁾（『末燈鈔』五）

などのことばは、自然（本願）に乗托して、生死のとらわれを離れていくありさまを具体的に示しており、死が受け容れられる。本願との出遇いによって「我」が砕かれ、絶対肯定の立場に導かれる。

他方、第二の課題について、人類は、死の不安を、科学技術の「進歩」による延命によって超えようとしてきた。つまり、それは、人間を生物として、さらには、「モノ」として対象化する方向であった。その結果、臓器移植、クローン、キメラ、代理母、精子バンク、卵子バンク、遺伝子操作、受精卵診断などで病気の克服、生命の操作が可能となり、延命をはたしつつある。しかし、反面、死の不安の完全解決とはなり得ず、それどころか基本的人間関係である親子関係すら定かでなくなってきた。人間の欲望を際限なく延ばし逆に人間を生物学的にも危機に落とし始めて

きた。人間の存在の意味が問われないまま放置されている。主体的な立場で私たちは、いのちをどう考えるのか。自我的欲望の延長で他を犠牲にしてまで、延命に執着する我が身のありようを問い掛ける場面でも、「自然法爾」は、ひとつの方向を指し示す概念である。その意味では、「自然法爾」は、親鸞の「いのち観」を表す、キーワードでもある。

三 自然法爾とは

自然法爾思想の根本原理は、「空」でありインドの二、三世紀の哲学者、ナーガルジュナの「中論」にある。平易に言えば「有無を離れる」という考え方である。親鸞などの日本仏教の中枢をなす思想である。つまり、あらゆる価値観を相対化し、それにとらわれず自然つまり、ありのままに身をゆだねるといふ考え方である。「あるがまま」（無我）である。（それは、自然体で意のままに何をしてもよいということではない。それは「わがまま」であり、「我執」である。）この考え方を最も具体的に展開したのは、やはり、親鸞である。では、親鸞の自然法爾とは、いかなる意味か。親鸞は、「末燈鈔」で、

「自然といふは 自はおのづからといふ。行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり。然といふはしからしむといふことば、行者のはからひにあらず如来のちかひにてあるがゆえに法爾といふは、如来の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾という。この法爾は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに、他力には義なきを義とすとしるべきなり。自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらずして、南无阿弥陀佛とたのませたまひて、む

かへんとはからはせたまひたるによりて行者のよからんともあしからんともおもはぬを自然とは、まふすぞと
きよてさふらふ。ちかひのやふは、无上佛にならしめんとちかひたまへるなり。无上佛とまふすはかたちもなく
まします。かたちもましまさぬへえに、自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときは、无上涅槃とはま
ふさず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とぞきよならいてさふらふ。彌陀佛は、自然
のやうをしらせんれうなり。⁽⁴⁾」

とのべる。
「自然」とは、如来の本願との出会いによって、人間のはからいがすたれる。そのことによって「おのずからしか
らしむ」という自然の世界に落ち着けることである。「法爾」とは、法のまま、つまり、如来真実の法がそのままは
たらくこと。如来の願力を示す。いわば、真宗の救済内容そのものである。

古来、真宗では、これについて三つの局面に分けて考察されており、聞法における主体的自覚の側からすれば、業
道自然、願力自然、無為自然が区別される。

業によって苦しんだり、喜んだりして流転する衆生も、それ自体は、おのずからそのようにある無明存在としての
在り方であって、それが業道自然である。

『大経』悲化段の

「善悪報応、禍福相承、身自當レ之、無ニ誰代者、数之自然」⁽⁵⁾

との経説にみられる。つまり、衆生が、善悪業道の自然をもって三界六道の生死に流転し苦悩は永遠に尽きないこと
を表す言葉である。

次に、そのような衆生存在が、因縁によって時機が熟して仏の願力の用きを自覚するのも自ずからそうなるのであって願力の自然である。『大経』悲化段の八句つまり、

「必^ズテ^{シテ}超^{ツル}絶^{コトヲ}去^ル」 往^ニ生^{シテ}安^ニ養^ニ國^ニ、横^ニ截^ニ五^ニ惡^ニ趣^ヲ、惡^ニ趣^ニ自^ニ然^ニ閉^ジ、昇^ル道^ニ無^シ窮^極、易^ク往^テ而^キ無^シ人^ヲ、其^ノ國^ニ不^ニ逆^セ違^フ、自然之所^{ナリク}牽^ク」(6)

に読み取れる立場とされる。すなわち、願力自然とは、業道自然たる流転の衆生を、無為自然の浄土へ迎えとらんとする本願のはたらきのありさまである。

さらに、願力に目覚めて、無明を破り、至る所の無礙の境地、あるいは、真如の法の世界そのものを無為自然という。『大経』の

「彼^ノ仏^ノ國^ノ土^ハ、無^ニ為^ニ自^ニ然^ニ、皆^ミ積^ミ衆^ノ善^ヲ、無^ニ毛^ニ髮^ノ之^モ惡^ニ」(7)

阿弥陀仏の浄土を老荘思想の語をかりて表現しているが、それは、願力自然の帰趣として、彼岸、涅槃としての意味がある。

業道自然の在り方から、無為自然に至るのであるが、その中核は、やはり、願力自然である。そして、それを願力自然の「もとよりしからしむ」と動的な用きの表現としてとらえたのは、親鸞である。

四 自然と満足

ところで、絶対否定によって、自然を自覚し、自我が否定されたとき、「おのずから」「もとよりしからしむ」と領ける。つまり、絶対否定による絶対肯定の世界である。そのことを、清澤満之は、『精神界』収載の「真正の独立」

と題する短文の中で、次のように述べる。

「生死はもとより自然法、わが精神は快く、此の自然法に従ひて、満足すると云う決着に至るのである。」⁽⁸⁾

彼は、絶対肯定を「満足」と表現する。彼にとって、それは、「生死巖頭」に立っての「死」の自覚という自己否定の結果、開かれて来た境地であった。彼はその境地を、

「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在せるもの、即ち是なり。只だ、夫れ絶対無限に乗托す。故に死生の事、亦た憂ふるに足らず。（略）我人は寧ろ、只管絶対無限の吾人に賦与せるものを楽しまんかな」⁽⁹⁾

と示す。

もとより、この「満足」、は「絶対滞足」であり、願力自然のありさまであり、それを、親鸞の言葉に求めれば、

「本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みち／＼て　煩惱の濁水へだてなし

如来淨華の聖衆は　正覚のはなより化生して

衆生の願染こと／＼く　すみやかにとく満足す。」⁽¹⁰⁾

である。

もとより、この『和讃』は、『浄土論』の

「観仏本願力　遇無過者　能令速満足　功德大宝海」⁽¹¹⁾

にもとづくものであり、それを曇鸞は「自体に満足す」⁽¹²⁾（『浄土論註』）といい、親鸞は、

「よく本願力を信樂する人はすみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむる也。」⁽¹³⁾（『尊號真像銘文』）

と、「そのみ（身）」つまり、主体的な立場での満足、つまり、絶対満足と示す。いうまでもなく、自力無効を信知して、他力自然に乗托して得られる境地である。つまり、一切を如来にまかせきり、いわゆる「がんばる」ことのいらぬ心境である。

むすび——本願への帰依と「愚」の自覚——

このように自然法爾とは、自力無効を信知し、本願に乗托して、「自然のままに」という在り方である。本願に帰依し、それに敬虔な思いを持ち、それに身をゆだねていくという考え方である。法に照らして自己を見つめたとき、有限で、ちっぽけな自己自身が見えてくる。人間の小賢しい智恵で、自然の法にさからえば、苦悩が生ずる。人間は万物の霊長でもないし、絶対ではない。それどころか粟散の一つにすぎず、一切の生きとし、生けるものは平等のいの中である。本願に南無しそれを謙虚に仰がねばならない。

自然の摂理を侵してまで、あるいは、他のいのちを犠牲にしてまで、自我的欲望を満たそうとするわれわれの在り方をもっと課題にすべきである。自我をどうコントロールするかということである。自然の法に従うべきである。私たちが、そして人類すべてが、無限に出遇い「おのずからしからしむ」在り方に立つべきである。それによって、無明なる近代の科学的技術的営為を自己の責任において荷負し、相対化することができるのではないか。また人間知性のおごりを自覚できるのではないか。つまり、「自然法爾」という概念を倫理の基本概念としたい。

また、末期医療における老いや死の受容も同様である。老いや死に挑戦するとか、勝つという人があるが、勝つことができるか。人は誰しも、老いて必ず死ぬ。老いや死に挑戦するとか、勝つという発想をするかぎり、老いや死はその人にとって敗北になり、不本意な死でしかない。そうではなく、いかに受容するかということではなければ、安らかな死にはならない。何も、上手な死に方することもいらんではないか。痛いときは痛いと言ひ、苦しいときは苦しいと言ひ、苦しいと言ひ、苦しいと言ひではないか。そう腹がすわったとき、結果的に安らげるのである。それが前にも述べた自然法爾である。善し悪しのものさしを離れたときに結果的にやすらげるのである。

われわれはもともと自然の中にいる。絶対無限の妙用の中に生かされ支えられているのである。その中で勝手な価値観を作り、自分で自分を苦しめているのである。自然を自己を超えたものとして仰ぎ、自然のはたらきにうなずいた自覚の表現が「愚」という名告りである。思えば、高値はみな愚と名乗っている。「愚が中の極愚」とは最澄のことばであり、愚痴の法然房、愚禿親鸞、大愚良寛……今「いのちの未来」を考えると、自然を仰ぎ、愚に還ることこそがその道ではなからうか。

〔事例〕

暁鳥 敏（一八七七―一九五四）

清澤満之の門下にあった彼はその影響もあり、死に関する思索も多い。『死の問題』（『暁鳥敏全集』涼風学舎刊第十巻）には

「我らは、いかに死を見、死に安住すべきか。如何なる人と雖も、恐れざるなきは死にあらざや、如何なる人も、

免れ難きは死にあらずや。ゆえにこの死の問題について思念をめぐらすは、我等人類の最大の仕事にして、最重の義務ならずんばあらず。」

と記す。さらに

「我、死の問題を思考し来る時、自力の計画総て捨てられ、あらぬ欲望と愛着はたちまち、泡と消え、ひたすらに自己のはかなさとかよわさとに心奪われ、仰いで、大慈の御親にすがるの外に道なきなり。」「されば、我等が現在の一念の如来他力の救済には、未来の救済の法、自ずから来るなり。死の問題に対する救済を感得する時に、あらゆる生の問題の解決の基礎を得たるなり。」

とその根本性を指摘する。

臨終の年に刊行した『絶対他力の大道（講話）』（全集第八巻）には、死について、

「他力というたとわしの外にあるやうであるが、わしがをるということが他力の活動である。（略）われわれがここへ来るといふことが生まれる、それから去るといふことは死ぬ。われわれが生まれるのも絶対の働きなら、ここから死んでいくのも絶対の働き。死生というものは、わしの力ではどうにもならん。宇宙の働きの上に生かされておる、死なしめられていく。」

と絶対無限の妙用としての他力を述べ、

「宇宙がわれわれに生を命ずるときは、生きておれよ。死を命ずるときは静かに死ねよ。そこに何のあつてもない、ふためきもない。生を楽しみ、死を楽しむ。」

と釈する。

また、昭和六（一九三一）年講述の『正信偈講話』（全集第八巻）には、

「死んでも死なんのだと、死に対する恐れが肉体を超えた永遠の命の世界に入る。これが帰命無量寿如来である。自分の命を肉体の間だというやうに考えてをる時は、肉体の死は非常な恐れである。その恐れの中から、教へに触れると、肉体のの始まる以前から以後へと流れてをる永遠なるもの、即ち無量寿に眼が開かれて肉体の死を超えた喜びを得るのである」

と、説いている。昭和二九（一九五四）年、その念仏共々の臨終を、秘書の野本永久が看取る。

阿部幸子（一九三一―一九九一）

京都大学大学院を修了し、八九年岡山大学に教授として転任した直後に大腸癌が分かる。癌について次のように記す。（『いのちを見つめる―進行癌の患者として―』探究社刊）

「文字通り生の中に死を見つめながら毎日を送っているわけだ。なぜ、生きながら死を見つめることが絶望に結びつかないのか。その答は単純明快だ。生の実相とは、死があつてこそ生が豊かになるという前提によって支えられている。生は死の反対概念であつて同時に反対概念ではない。少々矛盾した表現かもしれないが、常に死を眞実の生命を生きることになるのである。」

と述べ、旅路の果てに死があるのでなく、ここに控えている死が、生命の一瞬一瞬を生きよと常に指示し、「立体的生」ダイナミックな「躍動的生命」与えてくれる。

そんな彼女も、癌になる前は死が怖かつた。自分だけは例外であるといった気持ちがあつたと正直に述べている。

しかし、動かせない体を横たえ、

「癌を生きる日々を通じて死はだんだん親しみ深いものに変えられていく。もう時間が来たよ」と死に手を取られても「君はずっと私の友達だったね」と笑みがかえせそうである。分かり易く言い直すと死を見つめて延命を生きる日々を与えられたために私には、生の本当の意味がわかったように思われるのだ。(略)すべての難問に自ずと解決が与えられたような心境の日々になれた。」

と綴っている。

彼女の最後の思索、「死を前にして思うこと」の中で彼女は、

「癌になる前は、自分の力で生きているのだと自信過剰な私であった。人生の困難に直面しても、脱出路を見出すことも出来たし、様々の状況に柔軟に対応する能力もあると思っていた。(略)それまで、ただひたすら己の信じる道を歩き続けて来たが、立ち留まらざるをえなかった。まず第一に浮かんだ疑問は、これまでの人生を本当に自分だけの力で生きてきたかどうかということであった。他力によって生かされて来たのだ」と。なぜ今までこんな単純な真理に目を閉じていたのだろうか。気付くのが遅過ぎたと思うと同時に、気づかぬまま死ぬりよかったと。やっとの思いで、終バスに乗車できたのである。」

彼女は、自力の無効を知り、他力自然に目覚め、本願のバスにのって一九九一年一二月浄土へ還っていかれた。

註

- (1) 『定本親鸞聖人全集』(以下『親鸞全』) 三一七四
(2) 『親鸞全』 四一三〇

自然法爾のいのみち観（田代俊孝）

- (3) 『親鸞全』三―七四
- (4) 『親鸞全』二―二二〇
- (5) 『真宗聖教全書』一―四〇
- (6) 『真宗聖教全書』一―三二
- (7) 『真宗聖教全書』一―四一
- (8) 『清澤満之全集』（法藏館刊）五―一四〇
- (9) 『清澤満之全集』（同）七―三八一
- (10) 『親鸞全』二―八三
- (11) 『真宗聖教全書』一―二七〇
- (12) 『真宗聖教全書』一―二八八
- (13) 『親鸞全』三―八九